

新訳 POI (Personal Orientation Inventory) の作成

— 理解しやすい質問項目の作成を中心にして —

松 浦 光 和 *

A Construction of a New Translation of Personal Orientation Inventory (POI)

— With Focus on Constructing Understandable Items —

Mitsukazu MATSUURA

This study aims to establish a new translation of Personal Orientation Inventory (POI), different from the previously one translated and revised by Murayama and Fukui, to measure the effect of Basic Encounter Group. What motivated this study was the presence of students who expressed difficulty in understanding the items in the translation of Murayama and Fukui. The reasons could be that the expression in the previous translation had been out of date, or that the comprehensive faculty of language differed between the objects of Matsuura and those of Murayama and Fukui.

Though many translations of psychological tests have been made in the past, scarcely has the understandability of the question items been questioned. Considering the value of POI, the author undertook the research. According to it, the question items could be divided into the ones which were judged by more than 80% of the respondents to be “understandable,” and the ones less than 80%. The reasons are not clear yet.

In the new translation, only the items which scored more than 80% were applied, making it possible to conclude that the translation is understandable.

It is very likely that the items in each category in the original POI were arranged arbitrarily, not statistically. Whether they should be left as they are, or should be statistically rearranged will be the subject of future research.

The reliability of the newly translated POI has been verified. Its validity has been tentatively verified, which will also be the subject of future research.

key words: personal orientation inventory (POI); Basic encounter group; understandability; translation

1. 問題と目的

ベーシック・エンカウンター・グループ（以下 BEG と略す）の効果に関する日本での研究を村山・野島・阿部・岩井（1979¹⁷⁾、茂田・村山（1983²⁶⁾、

村山・野島・阿部（1987²²⁾、坂中・村山（1993²⁴⁾）が分析している。これらの分析によると調査の方法として心理テスト法、アンケート法、面接法、事例研究法が多用されている。心理テスト法としては Q 分類、SD 法、POI (Personal Orientation Inven-

* 東北学院大学人間情報学研究科 (所属：仙台白百合女子大学人間学部)
Postgraduate Course of Human Informatics, Tohoku Gakuin University

tory)^{注1)}、SEAS (POI 翻訳版の改変)、Self-Esteem、PF-スタディ、Y-G 性格検査、SCT、CMI、MPI、EPPS、Ego-Strength Scale があげられている (Table 1)。

この中の POI はマスロー (Maslow, A., 1954¹⁴⁾、1962¹⁵⁾) の「自己実現の人間」の概念などを理論的背景としてショストローム (Shostrom, E. L., 1963²⁵⁾) が開発した質問紙型性格検査である。マスローは、自己の内に潜在している可能性を最大限に開発し実現してゆく人を「自己実現の人間」とし、ここに精神的健康のモデルを求めた。このような人の持つ特性として、「現実をより有効に知覚しそれと快適な関係を保つ」、「自己・他者・自然を受容する」、「自発性、自分の外の問題にエネルギーを振り向ける」、「孤独を恐れない」、「自律的である」、「豊かな感受性をもつ」、「至高経験をやる」、「共同体感情をも

つ」、「親密な対人関係を形成する」、「民主的である」、「手段と目的の区別をする」、「哲学的で悪意のないユーモアを表現できる」、「創造性が高い」、「文化に組み込まれることに対して抵抗する」、などをあげ、これらの特性をどの程度備えているかを、精神的健康の指標とした。ショストロームは精神的健康を測定するためにマスローの考え方を参考にして POI を開発したといえる。

POI は、精神的成長・精神的健康の測定を目的としているが、この中にはロジャーズが想定した BEG 効果の要素が多く含まれていると考えられる。

村山・野島・阿部・岩井 (1979²²⁾) は BEG のもつ独自性を考慮し、グループ全体の成否を判定するテストが必要になるとしている。この考え方は ① 栗津・野島・村山 (1977³⁾)、② 村山正治・山田祐章・峰松修・冷川昭子・二藤部里美・深尾誠 (1982¹⁸⁾)、③ 村山正治・山田祐章・峰松修・冷川昭子・亀石圭志・二藤部里美 (1983¹⁹⁾)、④ 村山正治・山田祐章・峰松修・冷川昭子・亀石圭志 (1984²⁰⁾)、⑤ 阿部啓子・村山正治 (1984¹⁾)、⑥ 高松里・村山正治 (1984²⁷⁾)、⑦ 村山正治・山田祐章・峰松修・冷川昭子・亀石圭志 (1985²¹⁾)、⑧ 谷川・村山 (1990²⁸⁾) に引き継がれ、POI の翻訳版および、これを改変した SEAS 等が開発された。また ⑨ 福井 (1978⁷⁾)、⑩ 福井・小柳 (1980⁹⁾)、⑪ 福井 (1980⁸⁾) は POI を翻訳して使用している。福井 (1978⁷⁾) は「BEG が個人の成長の促進を目標としているとするなら、個人の成長を自己実現の達成度として把握することが可能」と考えて POI を使用し、谷川・村山 (1990²⁸⁾) は、ロジャーズが提言した「十分に機能する (自己の経験に開かれている、実存的に生きている、実存的状況下で自分の有機体を信頼できる手段とみなしている) 人間」を、マスローのいう「自己実現している (自分の才能・能力・可能性などが十分に機能し開発された状態にある) 人々」の一人と考え、マスローらの理論を背景とする POI が BEG の測定には適当だとしている。上の ①～⑧ (以下、村山版とする) ⑨～⑪ (以下、福井版とする) の詳細を Table 2 に示した。すなわち福井版は原版と同じく 150 対計 300 項目で二文択一方式である。これに対し村山版は主に項目が 150 以下で、一文質問で回答が「はい」「いいえ」の二者択一である。

Table 1 ベーシック・エンカウンター・グループの効果測定に使用された心理尺度の例

テスト名	具体的内容	項目数
Self-Esteem	自尊、自己受容	10
PF-スタディ (Picture-Frustration Study)	攻撃の方向、反応の型	24
Y-G 性格検査	情緒安定・社会的適応性・活動性・衝動性・内省性・主導性	140
SCT (Sentence Completion Test)	社会・家庭・身体・知能・気質・力学・指向	60
CMI (Cornel Medical Index)	情緒障害の評価、心身の自覚症の調査	195
MPI (Maudsley Personality Inventory)	内向性・外向性尺度、神経症的傾向尺度	80
EPPS (Edwards Personal Preference Schedule)	達成・追従・秩序・顕示・自律・親和・他者・認知・救護・支配・内罰・養護・変化・持久・異性愛・攻撃	225
Ego-Strength Scale	精神健康度、人格適応	68
POI (Personal Orientation Inventory)	自己実現価値など	150
自己実現スケール (SEAS)	POI の改変	60
Q 分類	研究者による	
SD 法	研究者による	

注 1) 文末を参照のこと

Table 2 POI・翻訳版 POI・改変 POI の形態

文中の 番号など	テスト の名称	開発・作成者	掲載論 文等の 発表年	形 態	項目文章の例	回答方法
①	自己実現スケール	粟津・野島・村山	1977	63対 (ついで文択一)	A. 私は自分の仕事に打ち込むことができる。 B. 私は自分の仕事に打ち込むことができない。	AかBを選択
②	POI 質問紙	村山正治・山田祐章・峰松修・冷川昭子・二藤部里美・深尾誠	1982	150項目 一文質問	23. 私はどんなに困っても、絶対に神頼みはしない。	「はい」「いいえ」
③	同上	村山正治・山田祐章・峰松修・冷川昭子・亀石圭志・二藤部里美	1983	同上	126. 私は怒りを表現するのに抵抗を感じる。	「はい」「いいえ」
④	Self-Actualization-Scale (SEAS)	村山正治・山田祐章・峰松修・冷川昭子・亀石圭志	1984	60項目 一文質問	31. 私は傷つきやすい自分を恐れない。	「はい」「いいえ」
⑤	改訂版 POI	阿部啓子・村山正治	1984	150項目 一文質問	128. 自分にいつも不満を感じている。	「はい」「いいえ」
⑥	POIの翻訳版	高松里・村山正治	1984	150対 二文択一	特に例示なし。	AかBを選択
⑦	Self-Actualization-Scale (SEAS)	村山正治・山田祐章・峰松修・冷川昭子・亀石圭志	1985	60項目 一文質問	3. 私は人生の不運にも立ち向かっていける。	「はい」「いいえ」
⑧	同上	谷川・村山	1990	同上	36. 理想像を求めることが、悪い結果をもたらすことがある。	「はい」「いいえ」
⑨	POI	福井	1977	150対 二文択一	A. 自発的に決めたことを信頼する。 B. 自発的に決めたことを信頼しない。	AかBを選択
⑩	POI	福井・小柳	1980	同上	同上	AかBを選択
⑪	POI	福井	1980	同上	同上	AかBを選択
原版	Personal Orientation Inventory (POI)	Everett L. Shostrom	1963	同上	A. I trust the decisions I make spontaneously. B. I do not trust the decisions I make spontaneously.	AかBを選択

福井・小柳 (1980⁹⁾) は、1970 年代のアメリカでは BEG 効果の研究には POI の使用が最も多いとしている。

POI を使用した研究の一部を Table 3 (Culbert, 1968⁴⁾ : Foulds, 1970⁵⁾, 1976⁶⁾ : 福井:1978⁷⁾, 福井・小柳:1980⁹⁾, Guinan, 1970¹¹⁾ : Jones, 1975¹²⁾ : Kimball, 1974¹³⁾ : Meltzer, 1980¹⁶⁾ : Young, 1970²⁹⁾) に示した。これらは BEG・マラソングループなどの集中的グループ経験の前後で POI を参加者に施

行して、効果を測定した結果である。

これらの先行研究を踏まえるとき、BEG の効果を測定するテストとして POI を選択することは適当であろう。ところで著者が BEG 効果を測定するために福井版・村山版を学生に使用すると、質問項目 (以下、項目と略する) の文章が分かりにくいという意見が多くあった。そこで改めて福井版・村山版を学生に提示して項目が「日本語として分かりやすい」「日本語として自然」「日本語として理解でき

Table 3 POI を使用した集中的グループ経験の研究報告例と測定結果

研究者	発表年	POI の 尺 度											
		TC	I	SAV	Ex	Fr	S	Sr	Sa	Nc	Sy	A	C
Culbert,Clark & Bobele	1968		*				*				*		*
Foulds	1970		*		*	*	*		*		*	*	*
Foulds & Hannigan	1976	*	*	*	*	*	*	*	*			*	*
福井	1978		*	*	*		*	*	*			*	*
福井・小柳	1980		*		*		*						
Guinan & Foulds	1970		*		*	*	*		*			*	*
Jones & Medvene	1975			*			*	*			*		
Kimball & Gelso	1974	*					*	*	*		*		
Meltzer	1980		*	*	*		*	*					*
Yong & Jacobson	1970			*									

* $p < .05$ 注) *印は、BEG前後での比較の結果、BEG後に有意なレベルで得点が上がった場合を示している。

る」の何れかならば「理解可能」と回答するように指示して調査を行った(坂原・松浦, 1997²³⁾)。その際、調査対象者の 80 %以上が「理解可能」と回答した場合、その項目を「理解容易」な項目と一応規定した。その結果、約半数が「理解容易」な項目であった。すなわち残り半数は「理解容易」ではなかったのである。これは福井版、村山版が翻訳されてから相当時間が経ち現在の学生には理解し難くなったからであろう。また、著者の調査対象者である大学生と福井・村山の調査対象者間に文章理解力に関して少なからぬ差のあることも考えられる。そもそも、これらの翻訳版は回答者をどのように想定して開発されているのであろうか。福井(1999¹⁰⁾)は「一般成人」を想定して開発したが、「中学生版」「高校生版」「大学生版」「一般成人版」を作成する必要があると指摘している。村山版については確認していない。

最近、BEG に大学生が参加するケースが多く見られる。効果測定に POI を使用する場合、項目の文章が参加学生にとって理解しやすいことが望ましい。そのような項目は一般成人に使用しても回答しやすいであろう。しかし現在ある翻訳版 POI には理解しやすい項目と理解しづらい項目が混在している。そこで BEG 効果を確実に測定するために理解しやすい翻訳版 POI が新たに必要になったのである。

本研究の目的は、大学生程度の人に理解しやすい日本語版 POI を作成することである。

2. 方 法

I. 理解しやすい質問項目の翻訳

1) 米語から日本語への翻訳

日本に 20 年以上滞在(翻訳当時)しているアメリカ人で、日本語が堪能な米国人キリスト教宣教師が原版(米語)を日本語に翻訳。次に、この翻訳された項目を米国語が堪能な日本人修道女が点検し、一部を修正した。更に、修正された翻訳文を米国在住期間が長く、大学で英語を担当する日本人教員が修正した。ここまでの過程で訳出された結果を第 1 次翻訳とする。

なお、調査の結果、第 1 次翻訳の中に理解困難な項目があった。これらについては、これまで多くの心理テストを翻訳し、大学で 35 年間以上に亘って臨床心理学・発達心理学の講義を担当する教員が、初めから翻訳し直した。これを第 2 次翻訳とする。

なお、日本の文化に馴染まない 8 項目については村山版の開発者より許可を得て(阿部, 1998)²⁰⁾ 村山版に倣った。例えば“96.A. I am orthodoxy religious.”, “96. B. I am not orthodoxy religious.”という項目は日本語にうまく訳せない。ここでいう orthodoxy とはアメリカのキリスト教教会のなかで伝統的な教派に属するものを指すからである。そこで、村山版の「96. A. 私は伝統的なものが好きである」, 「96. B. 私は伝統的なものが好きではない」を借用した。

2) 理解可能の頻度の調査

調査対象者に対し「理解可能」とは、日本語として分かりやすいこと、日本語として自然なこと、日本語として理解できること、であり調査対象者の項目に対する共感の是非ではないという説明をしてから、第1次翻訳の項目を提示して「理解可能」と回答した割合を調べた。

なお翻訳項目の提示方法であるが、原版は

A. People are basically good.

B. People are not basically good.

のように意味的に対応した組み合わせになっている。しかし翻訳文をこのままで提示し、例えば

A. 人は本来、善である。

B. 人は本来、善ではない。

のように並べると、二つの項目の意味が対応していることが分かれば、それによって理解が促進される可能性があるので、調査の際は組み合わせを切り離し乱数表に依って項目を並べ替えた。

80 %以上の学生から「理解可能」とされた項目を「理解容易」項目と判定し、全項目が「理解容易」になるまで、翻訳をし直した。なおこの80 %については、この位の割合の学生から「理解可能」とされる項目であれば、殆どの学生、更には一般の社会人を対象として使用できると考えたからである。

3) 調査時期 1997年6月から9月。

4) 調査対象 調査は4回に及んだが、それぞれ異なる学生を対象とした。

(1) 1回目(第1次翻訳), MK大学・M女子短大・M県立看護専門学校とY大学付属医療専門学校の学生, 合計149名(男子16名, 女子133名)。

(2) 2回目(第1次翻訳), F大学の学生86名(男子36名, 女子50名)。TN大学の学生180名(男子106名, 女子74名)。

(3) 3回目(第1次翻訳), TN大学の学生262名(男子153名, 女子109名)。

(4) 4回目(第2次翻訳), S大学的女子学生。91名。

II. POI 原版の尺度構造の解析。

POIには主尺度と下位尺度(以下でこれらをカテゴリーと表現する場合がある)がある。主尺度はTC(Time Competence, 時間的指向性), I(Inner

Directed, 自己への指向性)であるが, さらにTCを逆転したTI(Time Incompetence), Iを逆転したO(Other directed)がある。TC, Iが主尺度を代表する。また10の下位尺度があるが, それらはSAV(Self-Actualizing Value, 自己実現的価値), Ex(Existentiality, 実存性), Fr(Feeling Reactivity, 感受性), S(Spontaneity, 自発性), Sr(Self-Regard, 自己肯定), Sa(Self-Acceptance, 自己受容), Nc(Nature of Man, Constructive, 人間性の本質), Sy(Synergy, 統合性), A(Acceptance of Aggression, 攻撃性の受容), C(Capacity for Intimate Contact, 人間関係形成能力)である。これらの主・下位尺度の翻訳名は阿部・村山(1987¹⁾)を参考にした。

翻訳したPOIの項目をカテゴリーごとに構成するために, 原版の採点盤を通して, 各項目が所属するカテゴリーを特定した。

III. 新翻訳版 POI (以下, 新訳版) の信頼性の検討

再検査法によって信頼性を検討した。

(1) 調査時期 1998年1月から4月。

(2) 調査間隔 1週間, 2週間, 1ヶ月, 2ヶ月, 3ヶ月。

(3) 調査対象者

① 1週間間隔, S女子短期大学学生, 72名。

② 2週間間隔, S女子大学学生, 19名。

③ 1ヶ月間隔, T大学学生, 36名
(男子22名, 女子14名)。

④ 2ヶ月間隔, K女子短期大学学生, 98名。

⑤ 3ヶ月間隔, K女子短期大学学生, 41名。

IV. 新訳版の妥当性の検討

1) 調査対象者を自己実現群, 非自己実現群, 一般群に分け, 自己実現群と非自己実現群の間でPOIの中心的カテゴリーであるSAV(自己実現価値尺度)についての比較を行う。自己実現群が非自己実現群より高得点であればSAVの妥当性が確認される。

(1) 調査対象者

① 国立E病院付属看護学校学生

1998年12月 女子81名, 男子4名

② M県立高等看護学校学生

1999年1月 女子72名, 男子3名

③ R病院付属看護学校学生

1999 年 1 月 女子 81 名, 男子 2 名

この調査対象者集団を選択した理由は、看護教育のカリキュラムで、担当教員は学生と接触する機会が多く、学生の性格・行動・態度などを把握しているので、自己実現群、一般群、非自己実現群の適切な抽出が可能と考えたからである。

- (2) 検討方法 学生が POI に回答した後「明確な意見をもっていて、しっかりとした将来像を画き、自分の可能性を信じて、日々まじめに研鑽している」学生を自己実現群として 25 % 抽出、これと反対の「明確な意見をもってなく、しっかりとした将来像を画かなく、自分の可能性を信じてなく、日々まじめに研鑽していない」学生を非自己実現群として 25 % 抽出し、他は一般群とするように担当教員に依頼した。

- 2) 調査対象者を自己実現群、一般群、非自己実現群に分け、自己実現群と非自己実現群の間で全カテゴリーについて比較を行った。自己実現群が非自己実現群より高得点のカテゴリーがあれば、その妥当性が確認される。

- (1) 調査時期 1998 年 11 月。
 (2) 調査対象 S 女子短期大学で秘書教育課程のカリキュラムを履修している女子学生 93 名。この調査対象集団を選択した理由は、秘書課程のカリキュラムにおいて、担当教員は学生と接触する機会が多く、学生の性格・行動・態度などを把握しているので自己実現群、一般群、非自己実現群の適切な抽出が可能と考えたためである。
 (3) 検討方法 学生が POI に回答を記入後、上記

- 1) 同様に自己実現群 (25 %), 非自己実現群 (25 %), 一般群 (50 %) を抽出するように担当教員に依頼した。自己実現群と非自己実現群の間で各カテゴリーについて比較を行った。

- 3) SAV 尺度を基準にして高得点群と低得点群の間で比較を行い他のカテゴリーの妥当性を確認する。
 POI の中心的なカテゴリーは SAV と考えることができるが、高得点の調査対象者は自己実現傾向が高く、精神的に健康であるため他のカテゴリーにおいても高得点であると仮定できる。そこで SAV を基準にして調査対象者を高得点群と低得点群に分けて、両群間で他のカテゴリーについて比較を行う。あるカテゴリーにおいて SAV 高得点群が SAV 低得点群より高得点であれば、そ

のカテゴリーの妥当性が確認される。

- (1) 調査時期 1998 年 6 月より 12 月。
 (2) 調査対象 女子学生 720 名, 男子学生 93 名 計 813 名。
 (3) 検討方法 SAV 尺度の得点によって G 群 (上位 25 %) と P 群 (下位 25 %) とに分類し両群間で他のカテゴリーについての比較を行った。
 4) モーズレイ性格検査 (以下, MPI) との関連を通して妥当性を確認する。
 (1) 調査時期 1999 年 1 月。
 (2) 調査対象 T 大学学生 (男子 36 名, 女子 75 名, 計 111 名)。
 (3) 検討方法 POI と MPI の N (神経症的傾向尺度) 間の相関係数を算出して、POI の妥当性を確認した。
 5) カリフォルニア人格検査^{注2)} (以下, CPI) との関連を通して妥当性を確認する。
 (1) 調査時期 1998 年 11 月。
 (2) 調査対象 K 女子短期大学学生 45 名。
 (3) 検討方法 CPI の全尺度と POI の全尺度の間で相関係数を算出して、POI の妥当性を確認した。

3. 結 果

I. 理解しやすい質問項目の翻訳。

- (1) 1 回目の調査: 第 1 次翻訳を調査対象者に提示した。この際、10 対計 20 項目については提示する際に不備があったので集計には含めなかった。従って 1 回目に対象となったのは 140 対計 280 項目である。調査対象者の 80 % 以上が「理解可能」と回答した項目を「理解容易」な項目と前記で一応規定したが、「理解容易」とされたのは 92 項目、理解困難な項目は 188 項目であった。
 (2) 2 回目の調査: 1 回目の調査で残った 188 項目の翻訳を修正し、これに 1 回目の調査で不備のあった 10 対計 20 項目を加え 208 項目を調査対象者に提示した。この結果「理解容易」とされたのは 152 項目である。合計 244 項目が「理解容易」になり、理解困難な項目は 56 項目になった。
 (3) 3 回目の調査: 56 項目の翻訳を修正して提示した。その結果、17 項目が「理解容易」とされ、理解困難な項目は 39 項目になった。

注 2) 文末を参照のこと

(4) 4 回目の調査：残った 39 項目を翻訳し直して (第 2 次翻訳) 提示した。その結果、全てが「理解容易」となったので、翻訳作業を終了した。

これらの過程で、原版の 1 項目に対して最大 4 つの訳文を用意した場合があったが、複数の訳文が「理解容易」とされた場合は、その「理解可能」者の頻度が最も高い訳文を採用した。

訳文は合計 700 強になったが、この内の 300 を新翻訳テストの項目とした。

新翻訳を付録に掲載した。

II. POI 原版のカテゴリー構造の把握。

Table 4 に項目が所属するカテゴリーを示した。これは、全体の一部であるが、例えば項目 1B はカテゴリー C・Ex・I・S に所属し、項目 2B はカテゴリー C・Ex・I に所属し、項目 3B はカテゴリー Ex・I・Sa に所属し、4A はカテゴリー Fr・I に所属している。

項目とカテゴリーのこのような関係は Table 4 に示していない他の項目についても同様で、一つの項目が複数のカテゴリーに所属している。従って、このような構成は統計的な手法によってではなく、恣意的な手法によって規定されたと考えることができる。

III. 信頼性の検討

再検査法の結果を Table 5 に示した。各間隔ごとに、調査対象者の得点についてピアソン (Pearson) の相関係数を求め、これを信頼性係数とした。2 ヶ月間隔の Fr・Sy 尺度で信頼性係数はやや低いが、1 週間間隔・2 週間間隔・1 ヶ月間隔・3 ヶ月間隔では全尺度で信頼性係数は高い。

これらから、POI の信頼性は高いものであることが認められた。

IV. 妥当性の検討

1) 3 群の調査対象について自己実現群と非自己実現群に含まれる学生の選択を各校の教員に依頼したが、両群の人数に差が生じた。これは当該の教員にとって同数の選択が不可能と判断されたからである。両群の間で SAV の比較を t 検定で行ったが、自己実現群の得点が有意に高かった (Table 6)。これによって SAV の妥当性が確認さ

れた。

2) 調査対象者を自己実現群、一般群、非自己実現群に分け、自己実現群と非自己実現群の間で全カテゴリーについて t 検定で比較した (Table 7)。その結果、自己実現群は 23 名、非自己実現群は 22 名であった。自己実現群が A, C, Ex, Fr, I, SAV, Sr で有意に得点が高かったが、これらのカテゴリーの妥当性を確認できた。

3) SAV の得点によって調査対象者を高得点群 (上位 25 %) と低得点群 (下位 25 %) に分けた。両群とも 203 人であった。SAV 以外の 11 カテゴリーで比較した結果、13 カテゴリーで 0.1 % 以下の水準で有意な差があった。ここから SAV (自己実現的価値) を基準とする妥当性が確認さ

Table 4 各項目が所属するカテゴリー (一部)

項目番号	カテゴリー
1A	O
1B	C
1B	Ex
1B	I
1B	S
2A	O
2B	C
2B	Ex
2B	I
3A	O
3B	Ex
3B	I
3B	Sa
4A	Fr
4A	I
4B	O
5A	O
5B	Ex
5B	I
5B	Sa
6A	I
6A	S
6A	SAV
6B	O
7A	O
7B	I
7B	Sr
8A	O
8B	C
8B	Ex
8B	I
9A	O
9B	Ex
9B	I
10A	O
10B	Fr
10B	I
10B	SAV

Table 5 再検査法の結果 (信頼性係数)

間隔	調査対象者数	Tc	I	SAV	Ex	Fr	S	Sr	Sa	Nc	Sy	A	C
1 週間	72	.619**	.847**	.819**	.729**	.675**	.736**	.842**	.762**	.795**	.633**	.695**	.719**
2 週間	19	.764**	.744**	.775**	.640**	.566*	.779**	.823**	.708**	.550*	.616**	.705**	.605**
1 ヶ月	36	.841**	.817**	.815**	.754**	.774**	.768**	.592**	.597**	.663**	.533**	.743**	.775**
2 ヶ月	98	.582**	.636**	.659**	.622**	.300**	.608**	.662**	.580**	.567**	.380**	.574**	.601**
3 ヶ月	41	.574**	.650**	.556**	.636**	.605**	.649**	.606**	.727**	.412*	.541**	.752**	.693**

** $p < .01$ * $p < .05$

Table 6 3 校における自己実現群・非自己実現群間の SAV の比較

調査対象群	調査対象者数		平均得点		df	t
	自己実現群	非自己実現群	自己実現群	非自己実現群		
国立 E 病院付属看護学校学生	20	22	16.55	13.91	40	2.51*
M 県立高等看護学校学生	20	18	15.85	13.16	36	2.67*
R 病院付属看護学校学生	13	15	16.13	13.38	26	2.51*

* $p < .05$

Table 7 自己実現群・非自己実現群間の比較

カテゴリー	平均得点		df	t
	自己実現群	非自己実現群		
Tc	11.86	12.00	43	0.20
I	74.41	66.30	43	3.32**
SAV	16.36	13.13	43	3.46**
Ex	19.64	17.74	43	2.33*
Fr	13.82	12.22	43	2.11*
S	10.45	9.04	43	1.92
Sr	8.77	7.26	43	2.15*
Sa	14.82	14.39	43	0.50
Nc	10.05	9.57	43	0.84
Sy	5.59	5.26	43	0.88
A	14.73	12.83	43	2.39*
C	16.68	13.65	43	3.54**

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 8 SAV 高得点群と同低得点群の比較

カテゴリー	平均得点		df	t
	高得点群	低得点群		
Tc	12.95	11.36	404	6.59***
I	75.86	59.59	404	22.80***
Ex	19.35	16.65	404	8.65***
Fr	13.95	10.77	404	13.80***
S	11.50	7.52	404	19.28***
Sr	9.77	5.53	404	22.19***
Sa	14.99	13.77	404	4.72***
Nc	10.54	8.66	404	9.72***
Sy	6.46	4.57	404	15.70***
A	14.99	11.10	404	15.32***
C	15.56	12.92	404	9.74***

*** $p < .001$

n=813

れた。(Table 8)。

- 4) MPI の N 尺度との間の相関係数を算出した (Table 9)。N 尺度と POI の 12 尺度との間には、低い相関があるか、あるいは無相関に近かった。すなわち、精神的健康を測定する POI の全カテゴリーは、神経症的傾向とは殆ど関係がなく妥当性が確認された。
- 5) CPI の全尺度との間の相関係数を算出した (Table 10)。一つ一つについて検討する。

- ① Tc (POI) と Le (CPI)。Tc で高得点の人は「いま、ここ」を正確に認識する人であるが、Le で高得点の人は、認識力の高い人である。認識力の高い事と「いま、ここ」を正確に認識する事の間には関連性が考えられるが、高い相関 ($r = .54$, $p < .01$) によって、Tc の妥当性が確認できた。
- ② I (POI) と Sp (CPI)。I で高得点の人は外部の権威にとらわれず自分の内部の欲求によって

Table 9 POI と MPI の相関

カテゴリー	Tc	I	SAV	Ex	Fr	S	Sr	Sa	Nc	Sy	A	C
	時間的 指向性	自己への 指向性	自己実現 的価値	実存性	感受性	自発性	自己 肯定	自己 受容	人間性 の本質	統合性	攻撃性 の受容	人間関係 形成能力
N (MPI)	-.35**	-.11	-.19*	.35	-.02	-.35**	-.27**	-.03	-.12	-.05	.19*	.01

** $p<.01$ * $p<.05$

N=111

Table 10 POI と CPI の相関

テスト	下位 尺度	テスト カテゴリー	P O I										A	C
			Tc	I	SAV	Ex	Fr	S	Sr	Sa	Nc	Sy		
			時間的 指向性	自己への 指向性	自己実現 的価値	実存性	感受性	自発性	自己 肯定	自己 受容	人間性 の本質	統合性	攻撃性 の受容	人間関係 形成能力
CPI	Ac	順応な成就欲求	.43**	.28	-.01	.14	-.02	.15	.27	.29	.17	.12	.04	.27
	Ai	自律的な成就欲求	.32*	.17	.02	.13	-.10	.08	.16	.36*	.08	.12	-.03	.11
	Cm	社会的常識性	-.10	-.03	.13	-.09	.16	-.10	-.01	-.10	.06	.08	.01	-.11
	Cs	社会的成就能力	.22	.20	.10	.30	-.10	.34*	.21	.25	.01	.11	.00	.20
	Fe	女性的傾向	-.05	.07	.23	.30	.06	-.06	-.05	-.20	.17	.19	.15	.11
	Fx	融通性	.39*	.46**	.14	.62**	.06	.33*	.07	.52**	.33*	.30	.07	.43**
	Gi	自己顕示性	.26	.10	.03	.11	-.25	.20	.25	.01	.21	.21	-.14	.00
	Le	知的能力	.54**	.38*	.03	.21	.07	.34*	.24	.50**	.09	.08	.10	.36*
	Py	共感性	.38**	.48**	.26	.43**	.26	.36*	.42**	.39	.27	.28	.08	.30
	Re	責任感	.41**	.14	.06	.12	-.21	.19	-.02	.05	.14	.26	-.02	.16
	Sa	自己満足感	.03	.41**	.20	.34*	.34*	.38*	.25	.26	-.06	.07	.34*	.34*
	Sc	自己統制力	.43**	.09	-.06	.09	-.22	-.03	.01	.15	.23	.09	-.05	.17
	So	社会的成熟性	.19	-.10	.05	-.11	-.13	-.01	.17	-.20	.15	.05	.06	-.09
	Sp	社会的安定感	.44**	.55**	.28	.36*	.19	.44**	.44**	.37*	.28	.31	.29	.24
	Sy	社交性	.17	.27	.18	.07	.02	.46**	.50**	.21	.07	.12	.18	.16
	To	寛容性	.48**	.31*	.14	.24	-.05	.25	.17	.25	.26	.24	.03	.33*
	Wb	幸福感	.43**	.39*	.13	.29	.06	.39*	.26	.27	.33*	.23	-.01	.34*

** $p<.01$ * $p<.05$

N=45

行動する。一方、Sp で高得点の人は、形式にとらわれず、自発的で、能動的で、活発な人である。「外部の権威にとらわれない」(I) 事と「形式にとらわれない」(Sp) 事は関連していると考えられるが、高い相関 ($r=.55$, $p<.01$) によって I の妥当性が確認できた。

- ③ Ex (POI) と Fx (CPI)。Ex で高得点の人は柔軟性があり、Fx で高得点の人は融通性がある。柔軟性のある人は融通性も高いと考えられるが、高い相関 ($r=.62$, $p<.01$) によって Ex の妥当性が確認できた。

- ④ Sr (POI) と Sy (CPI)。Sr は自尊心であり自分自身を認める傾向を測定する、Sy は社交性尺度であるが自信の程度も測定する。両者は関連性が高いと考えられるが、相関 ($r=.50$, $p<.01$) も高い。従って Sr の妥当性を確認することができた。

- ⑤ Sa (POI) と Fx・le (CPI)。Sa で高得点の人は、自分の弱点や欠点を受容することができる。Fx で高得点の人は洞察が豊かであり、Le で高得点の人は、認識力がある。Sa - Fx 間、Sa - Le 間には高い相関があるが、受容は認識や洞察と関わっているからであろう。Sa の妥当性が確認できた。

- ⑥ SAV・Fr・S・Nc・Sy・A・C (POI) は CPI の全項目と高い相関はなかった。

これらから、Tc, I, Ex, Sa, Sr の妥当性を確認することができたが、他の SAV・Fr・S・Nc・Sy・A・C については CPI との間では妥当性の確認はできなかった。

4. 考察と今後の課題

この研究の目的はベーシック・エンカウンター・グループの効果をより高い精度で測定するために、

これまで作成された村山版 POI や福井版 POI とは別に、新しく翻訳版を作成することであった。その理由は従来の翻訳版を理解困難とする学生が多いことである。今回は調査対象者の 80 % 以上から「理解可能」と判定された項目のみで新訳版を作成した。

新訳版の信頼性を再検査法によって検討した結果、2 ヶ月間隔で Fr・Sy が低い信頼性係数を示したが、信頼性が問題になるような低さではない。1 週間、2 週間、1 ヶ月、3 ヶ月間隔では Fr・Sy の信頼性係数は高く、全般に信頼性は確認されたと考えることができる。

次に妥当性であるが、調査対象者（学生）から、学内での生活状況を鑑みて自己実現群と非自己実現群を抽出して、SAV・全カテゴリーについて両群間で比較を行い、妥当性を確認した。更に SAV を基準にして調査対象者を高得点群と低得点群に分けて、両群間で、SAV 以外のカテゴリーについての比較を行い、妥当性を確認した。また、MPI との間でも妥当性を確認した。CPI との間では Tc, I, Ex, Sa, Sr の妥当性を確認できた。これらの結果は、ショストローム (1964²⁵⁾、福井 (1980⁸⁾、粟津、(1977³⁾ らの研究と一部共通している。

新訳版によって回答者は項目の理解に困難を感じることは少なくなり、回答データの信頼性が向上するであろう。

原版は項目の属するカテゴリーを恣意的に決めたと考えられるが、新訳版を統計的な手法で構成し直すのが適当か、原版に従ったままで良いのか。また、現在の二文章択一のテスト形態を村山版の一つのように変更して、一項目に対し「はい」「いいえ」で回答する形式にすれば項目を半減できるが、これらを今後の課題にしたい。

謝辞

本論文を作成する上で、ご指導くださった福井康之先生（鳴門教育大学）・坂原明先生（聖カタリナ女子短期大学）、翻訳にご協力くださったジョー・ストラウド宣教師（日本キリスト教団山越教会）、矢口洋生先生（仙台白百合短期大学）、調査対象者となった学生の皆様に感謝します。

文 献

- 1) 阿部啓子・村山正治 エンカウンター・グループの効果測定尺度作成の試み 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）、1984, 29 (2), 221-228.

- 2) 阿部啓子 研究グループを代表して筆者への項目使用許可の書簡, 1998.
- 3) 粟津幹子・野島一彦・村山正治 自己実現スケールの作成 九州大学心理教育相談室紀要, 1977, 3, 117-131.
- 4) Culbert, S. A., Clark, J.V., & Bobele, H. K Measures of change toward self-actualization in two sensitivity training group. Joral of Counseling Psychology, 1968, 15, 53-57.
- 5) Foulds, M. L Effects of personal growth group on measure of self-actualization, Joral of Human Psychology, 1970, 10, 33-38.
- 6) Foulds, M. L., & Hanningan, P. S. Effects of Psychomotor group therapy on locus of control and social desirability, Joral of Human Psychology, 1976, 16, 81-88.
- 7) 福井康之 自己実現測度にみるエンカウンター・グループ経験の効果 愛媛大学教育学部紀要第 1 部（教育科学）、1978, 71-79.
- 8) 福井康之 教員養成教育のカリキュラムの一案としての人格成熟促進プログラムによる授業の効果とその検討 — POI（自己実現尺度）による効果測定を手がかりとして — 愛媛大学教育学部「教科 教育の体系的研究」、1980, 12, 21-37.
- 9) 福井康之・小柳晴生 エンカウンター・グループ経験の効果の測定について 相談学研究, 1980, 13(1), 1-7.
- 10) 福井康之 筆者の質問に対する回答, 1999.
- 11) Guinan J. F., Foulds, M. L. Marathon group : Facilitator of personal growth? Joral of Counseling Psychology, 1970, 17, 145-149.
- 12) Jones, D. S., Medvene.A.M. Self-actualization effects of a marathon group. Joral of Counseling Psychology, 1975, 22, 39-43.
- 13) Kimball, R., Gelso, C. J. Self-actualization in marathon growth group: Do the strong get stronger?. Joral of Counseling Psychology, 1974, 21, 38-42.
- 14) Maslow, A. H. Motivation and personarity Harper & Brothers New York, 1954. (小口忠彦監訳 1971 人間性の心理学 産業能率短期大学出版部 1971.)
- 15) Maslow A. H. Religion Values and Peak-experiences: Ohio State University Press, Columbus, 1964. (佐藤三郎・佐藤全弘 訳創造の人間 誠信書房 1972)
- 16) Meltzer, H. "The impact of encounter groups: actualization differences between a T-lab group and humanistic psychology group Small Group Behavior" 1980, 11, 23-33.
- 17) 村山正治・野島一彦・安部恒久・岩井 力 日本に

- おける集中的グループ経験研究の展望 実験社会 心理学研究, 1979, **18**, 139-152.
- 18) 村山正治・山田祐章・峰松 修・冷川昭子・二藤部里美・深尾 誠 自己実現尺度で測る精神的健康 (1) 健康科学, 1982, **4**, 177-185.
- 19) 村山正治・山田祐章・峰松 修・冷川昭子・亀石圭志・二藤部里美 自己実現尺度で測る精神的健康 (2) 健康科学, 1983, **5**, 1-9.
- 20) 村山正治・山田祐章・峰松 修・冷川昭子・亀石圭志 自己実現尺度で測る精神的健康 (3) 健康科学, 1984, **6**, 45-57.
- 21) 村山正治・山田祐章・峰松 修・冷川昭子・亀石圭志 自己実現尺度で測る精神的健康 (4) — SEAS に関する統計資料— 健康科学, 1985, **7**, 111-118.
- 22) 村山正治・野島一彦・安部恒久 日本におけるパーソン・センタード・グループ・アプローチの現状と展望 九州大学心理臨床研究, 1987, **6**, 169-177.
- 23) 坂原 明・松浦光和, 1997, POI の理解度の調査, 未公開.
- 24) 坂中正義・村山正治 日本におけるエンカウンターグループ研究の展望 九州大学教育学部紀要教育心理学部門, 1995, **38**, 299-309.
- 25) Shostrom, E. L., An inventory for the measurement of self-actualization. Education and psychological measurement, 24, 1964, **24**, 207-218.
- 26) 茂田みちえ・村山正治 日本における「集中的グループ経験」の効果研究に関する文献集録 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), 1983, **28**, 63-72.
- 27) 高松 里・村山正治 エンカウンター・グループにおける体験内容と効果との関連について—「体験内容目録」の作成を通して— 九州大学教育学部紀要教育心理学部門, 1984, **29**, 55-65.
- 28) 谷川由美・村山正治 エンカウンター・グループにおける自己実現度の促進効果—「自己照合」の視点からの検討— 九州大学教育学部紀要教育心理学部門, **35**, 1991, 119-128.
- 29) Young, E. R., & Jacobson, L. I. Effects of time-extended marathon group experiences on personality characteristics Journal of Counseling Psychology, 1970, **17**, 247-251.

(受付: 1999. 3. 19, 受理: 1999. 9. 11)

注 1) POI の主尺度・下位尺度については, Shostrom, E. L. (1966), 阿部・村山 (1987), 福井康之・小柳晴生 (1980) の説明によった。各尺度の内容は次のようである。

- TC (時間的指向性): 過去と未来が現在と意味のある連続として捉えられているかどうか」を測定している。得点の高い人は、「いま、ここ (here and now)」に生きている。
- I (自己への指向性): 「行動様式が自己の内部の欲求によるか、或いは社会や他者の権威によるか」を測定している。高得点の人は自分の内部の欲求による。
- SAV (自己実現的価値): 「自己実現の人間が持つ価値観をどの程度肯定しているか」を測定している。自己実現的な人間ほど高得点である。マスロー (Maslow) の自己実現している人の研究に基づく概念から構成されている。
- Ex (実存性): 「社会的原理にとらわれることなく、状況に即して柔軟に行動できるかどうか」を測定している。高得点の人は価値の適用に柔軟性を持っている。低得点者は強迫的でさえある。
- Fr (感受性): 自分自身の内部に生じた欲求や感情に対する感受性。高得点の人は自分自身の心の動きに敏感である。低得点の人は真の自己の欲求に防衛的である。
- S (自発性): 自分自身の内部に感じた欲求や感情を自発的行動として表現する能力。高得点の人は、ありのままの自分であることができる。低得点の人は、自分の感情の表現を恐れる。
- Sr (自己肯定): 自尊感情を測定している。高得点の人は自分を過少評価したり無視したりすることなく、自分自身の持つ良い面を積極的に認めている。
- Sa (自己受容): 「自己の持つ弱さや欠点を知った上で、どの程度自己を受け入れることができるか」を測定している。高得点の人は自分の弱さや欠点を受け入れることができる。
- Nc (人間性の本質): 人間の本質を善として建設的に捉えようとしている程度。高得点の人は人間を基本的に善とみている。
- Sy (統合性): 「一見、対立しているように見える対象の本質をどの程度統合して捉えることができるか」を測定している。高得点の人は、仕事と遊び、快楽と愛など両極的な価値を意味あるものとして受容できる。
- A (攻撃性の受容): 「人間関係において必然的に生ずると思われる攻撃的感情をどの程度受容できるか」を測定している。高得点の人は攻撃性、怒りに対して不自然、不合理な抑圧を持たず、自然な本能として受け入れることができる。
- C (人間関係形成能力): 「義務感に縛られず、期待をかけられても負担に思うことなく、親密な人間関係を形成した

り保持したりすることができるかどうか」を測定している。高得点の人は単に安らぎや暖かさだけでなく、厳しさも伴った深みのある人間関係を作ることができる

注 2) CPI (カリフォルニア人格検査：誠信書房) の尺度の説明をマニュアルより抜粋した。各尺度の内容は次のようである。

- Do (支配性)：指導性の能力，支配性，根気強さ，社会的指導力の程度を測定する。
Cs (社会的成就能力)：まだ成就されていない社会的地位を達成しようとする個人の能力と社会的技術の程度を測定する。
Sy (社交性)：外向性，社交性，人づき合いの良きの性質をどの程度持っているかを測定する。
Sp (社会的安定感)：対人関係における心的安定感，自発性，自信の程度を測定する。
Sa (自己満足感)：自己の価値を認め，自己に満足して自立的に思考し，行動する能力の程度を測定する。
Wb (幸福感)：心身ともに健康で，悩みや不満を感じることが，どの程度なのかを測定する。
Re (責任感)：誠実で責任感があり，たよりになる傾向や性質をどの程度持っているかを測定する。
So (社会的成熟性)：社会的成熟，誠実，正直さをどの程度持っているかを測定する。
Sc (自己統制力)：自己規制，自己統制がどの程度充分であり，衝動的・自己中心的傾向からどの程度脱皮しているかを測定する。
To (寛容性)：自己および他人にどの程度許容的・受容的・無批判的な社会的信念と態度を持っているかを判定する。
Gi (自己顕示性)：好ましい印象を創り出すことや他人が自分をどのように見ているかに関心を持っている程度を測定する。
Cm (社会的常識性)：この検査に対する個人の回答が，多く回答される共通の型にどの程度一致しているかを測定する。
Ac (順応的な成就欲求)：順応することによって成就できるような場面で，その成就を促進させる関心や要求がどの程度あるかを測定する。
Ai (自立的な成就欲求)：自立することによって成就できるような場面で，その成就を促進させる関心や要求がどの程度あるかを測定する。
Ie (知的能力)：個人がすでに持っている内的，知的能力の程度を測定する。
Py (共感性)：他人の内的欲求や感情にどの程度関心があり，感応するかを測定する。
Fx (融通性)：個人の思考や社会的行動における融通性，適応性の程度を測定する。
Fe (女性的傾向)：関心が女性的傾向（高得点）にあるか男性的傾向（低得点の場合）にあるかを測定する。

付録 新訳版の項目

- 1 A 私は誰に対しても常に公平である。
B 私は誰に対しても常に公平であるとは限らない。
- 2 A 友人が親切にしてくれると，お返しをしなければ，と思う。
B 友人が親切にしてくれても，必ずしもお返しをしなければならないとは思わない。
- 3 A いつも本当のことを話すべきだ。
B 私はいつも本当のことを話しているわけではない。
- 4 A どんなに誠意を尽くしても人から気持を傷つけられることがある。
B 誠意を尽くせば，必ず相手に分かってもらえる。
- 5 A 何事も完璧（かんぺき）に成し遂げなければ満足できない。
B ものごとを完璧に成し遂げなくても構わない。
- 6 A 自分の気持に沿ってものごとを決めることが多い。
B 自分の気持に沿ってものごとを決めることはめったにない。
- 7 A 私はそのままの自分を出すことが恐い。
B 私はそのままの自分を出すことができる。
- 8 A 初めて会った人から親切にされると，重荷を感じる。
B 初めて会った人から親切にされても，重荷には感じない。
- 9 A 自分がしてほしいことを他人に期待しても良い。
B 自分がしてほしいことを他人に期待するのは良くない。
- 10 A 私は他の人々の価値観に合わせて行動することが多い。
B 私は自分の価値観で行動することが多い。

- 11 A いつも自分を向上させたいと思っている。
B 自分を向上させることに、いつも関心を持っているわけではない。
- 12 A 自己中心的にふるまうと、気がとがめる。
B 自己中心的にふるまっても、気はとがめない。
- 13 A 怒ることはとりたてて悪いことではない。
B 怒ることは、絶対に避けるべきだ。
- 14 A 自分の可能性を信じていれば、どんな道も開けてくる。
B 自分の可能性を信じていても、限界にぶつかることはある。
- 15 A 自分の立場よりも他人の立場を優先させることが多い。
B 他人の立場よりも自分の立場を優先させることが多い。
- 16 A ほめられると照れてしまうことがある。
B ほめられても、あまり照れない。
- 17 A 他人をあるがままに受けとめることが大切である。
B 他人がどうして、そのようにするのか理解することが大切である。
- 18 A 今日やるべきことを明日にのばすことがある。
B 今日やるべきことは、今日中に済ませなければ気がすまない。
- 19 A たとえ感謝されなくても、人に何かをしてあげることができる。
B 人に何かをしてあげた時には感謝してもらいたいと思う。
- 20 A 私の道徳心は社会の影響によってできたものである。
B 私の道徳心は自分自身によってつくられたものである。
- 21 A 他の人々の期待に沿って行動したい。
B 他の人々の期待に沿って行動する必要はない。
- 22 A 私は自分の欠点を認めている。
B 私は自分の欠点を認めない。
- 23 A 精神的に成長するためには、自分の行動を自覚する必要がある。
B 精神的に成長するためには、必ずしも自分の行動を自覚する必要はない。
- 24 A 私は、ときどき不機嫌になる。
B 私は不機嫌になることは、ほとんどない。
- 25 A 何かをするとき、他人の賛成を得ることが必要だ。
B 何かをするとき、他人の賛成を得ることは必ずしも必要ではない。
- 26 A 私は間違うことが怖い。
B 私は間違うことを恐れない。
- 27 A 私は自分の下した決断に自信を持てる。
B 私は自分の下した決断に自信を持ってない。
- 28 A 自分に対する評価は、自分がどれだけのことを成し遂げたかによって決まる。
B 結果だけでは、自己評価は決まらない。
- 29 A 私は失敗することが怖い。
B 私は失敗を恐れない。
- 30 A 私の道徳心の大部分は、他人の考え、感情、決定に影響されている。
B 私の道徳心は、他人の考え、感情、決定にほとんど影響されない。
- 31 A 自分の望み通りに人生を送ることができると思う。
B 自分の望み通りに人生を送ることはできない。
- 32 A 私は困難を乗り越えてゆける。
B 私は困難を乗り越えることができない。
- 33 A 他人と接するとき、感じたままを口に出してもよい。
B 他人と接するとき、感じたままを口にしてはいけなない。
- 34 A 人間の権利について、強い関心を持っている。
B 人間の権利について、特に関心を持たない。
- 35 A 人とつき合うとき、言うべきことはきちんと言う。
B 人とつき合うとき、あたりさわりのない態度をとってしまう。
- 36 A 自分の利益を追求してゆくと、他人と対立するときがある。
B 自分の利益を追求しても、他人と対立することはない。
- 37 A 教えられた道徳の多くを私はこれまで、拒否してきた。
B 教えられた道徳を拒否したことはない。

- 38 A 私は自分の欲求・好き嫌い・価値観に従って生きている。
B 私は自分の欲求・好き嫌い・価値観を中心にして生きているわけではない。
- 39 A 私は状況判断が上手だと思う。
B 私は状況判断が下手だと思う。
- 40 A 私にはうまく生きていく能力が生まれつき備わっていると思う。
B 私にはうまく生きていく能力が生まれつき備わっているとは思えない。
- 41 A 利益を追求するとき、自分の行動の正しさを考える必要がある。
B 利益を追求するとき、自分の行動の正しさを考える必要はない。
- 42 A 自分が無力であるという恐れに悩まされることがよくある。
B 自分が無力であるという不安に悩まされることがほとんどない。
- 43 A 本質的に人は善であり、信頼できるものだ。
B 本質的に人は悪であり、信頼できないものだ。
- 44 A 私は社会の規則や基準に従って生きている。
B 私は社会の規則や基準にいつも従っているとは限らない。
- 45 A 私はさまざまなルールにしばられて生きている。
B 私はさまざまなルールにしばられてはいない。
- 46 A 私は自分の感情を正当化しようとする。
B 自分の感情を正当化する必要はない。
- 47 A 沈黙が自分の気持ちを最もよく表わす場合もあると思う。
B 沈黙で自分の気持ちを表わすのは難しいと思う。
- 48 A 過去の行いについて言い訳をしたくなる。
B 過去の行いについて言い訳をしたくはない。
- 49 A 自分の知り合いは、みんな好きだ。
B 自分の知っている人全部が好きだというわけではない。
- 50 A 批判されると私の自尊心は傷つく。
B 批判されても私の自尊心は傷つかない。
- 51 A 善悪の知識があると人は正しく行動する。
B 善悪の知識があっても、人は正しく行動するとは限らない。
- 52 A 私は好きな人を怒ることができない。
B 私は好きな人を怒ってもおかまわないと思う。
- 53 A 重要なことは自分自身が何を必要としているかに気付くことである。
B 重要なことは他人が何を必要としているかに気付くことである。
- 54 A 他人に自分を売り込むことが最も重要である。
B 自分をありのままに表現することが最も重要である。
- 55 A 人と接しているときに、気持ちが落ち着く。
B 一人でいるときの方が、精神的に安定する。
- 56 A たとえ友情にひびが入ろうとも、私は正しいと思うことを言う。
B 友情にひびが入る危険があるときは、私は正しいと思うことでも言わない。
- 57 A 約束は必ず守らなければならない。
B 約束は必ずしも守る必要はない。
- 58 A 絶対に悲しい思いはしたくない。
B 悲しいことを受け入れることができる。
- 59 A 私はいつも、将来のことを予測しようとする。
B 私は将来のことを、あれこれ考えたりはしない。
- 60 A 人が私の考え方を認めてくれることは大切なことである。
B 他の人が私の考え方を認めてくれなくても構わない。
- 61 A 私は友達に対して批判や反対をすることができない。
B 私は友達に対して、ほめることも批判することも遠慮なくできる。
- 62 A 状況を考えて発言するよりも、感じたままを素直に発言する方が重要である。
B 感じたままを素直に発言するよりも、状況を考えて発言する方が重要である。
- 63 A 私は、成長のために批判を受け入れる。
B 自分の成長のためであっても、人からの批判を受け入れることができない。
- 64 A 外見は何よりも大切である。
B 見かけはそれほど大切ではない。

- 65 A 私は人の陰口を言わない。
B 私は時には人の陰口を言うことがある。
- 66 A 私は、自分の弱点を友達に見せることができる。
B 私は、自分の弱さを友達に見せることに抵抗を感じる。
- 67 A 他人が気分を害したとき、いつも自分のせいだと思ってしまう。
B 他人が気分を害したとき、必ずしも自分のせいだとは思わない。
- 68 A 自分を正直に出すことによって不都合が生じても構わないと思う。
B 自分を正直に出すことによって不都合が生じるのは困る。
- 69 A 自分の気持はよく理解できる。
B 歳をとるにつれ、自分の気持がよく分かるようになってきた。
- 70 A 初めて会った人に自分の弱さを見せることをためらう。
B 初めて会った人にでも自分の弱さを見せることができる。
- 71 A 社会的に認められた高い目標を目標とすることによってのみ、私は成長する。
B そのままの自分を受け入れるとき、私は最も成長する。
- 72 A 自分の中の矛盾を許すことができる。
B 自分の中の矛盾を許すことができない。
- 73 A 人は本来、他人と協調できるものである。
B 人は本来、他人と対立するものである。
- 74 A 下品な冗談を聞くと笑ってしまう。
B 下品な冗談を聞いても、心から笑えない。
- 75 A 幸福は人間関係の中から自然に生まれる。
B 幸福を得るために、人は人間関係を築こうとする。
- 76 A 私は、初めて会った人にでも好意的に接することができる。
B 私は、初めて会った人に対してそっけなくすることがある。
- 77 A 正直でありたいが、実行できないこともある。
B 正直でありたいし、現に私は正直である。
- 78 A 利己主義は自然なものである。
B 利己主義は不自然なものである。
- 79 A 人間関係がうまくいっているか、いないかは第三者でも判断できる。
B 人間関係がうまくいっているか、いないかは当事者でなければ判断できない。
- 80 A 私にとって仕事（学業）と遊びは同じものである。
B 私にとって仕事（学業）と遊びは反対のものである。
- 81 A お互いに相手を気づかえれば二人の人間は、うまくやっていける。
B お互いに自分自身を遠慮なく出し合えば、二人の人間はうまくやっていける。
- 82 A 過ぎ去ったことを思い出して腹を立てることがよくある。
B 過ぎ去ったことを思い出してくよくよすることはない。
- 83 A 男は男らしく、女は女らしくあるべきだと思う。
B 男らしさと、女らしさを併せ持った人に魅力を感じる。
- 84 A できる限り、恥ずかしい思いはしたくない。
B 恥をかくことを、あえて避けようとは思わない。
- 85 A 自分の不幸は両親のせいだと考える。
B 自分の不幸を両親のせいとは考えない。
- 86 A ふざける場合は、時と場所を考えるべきである。
B ふざけたい場合には、いつでもふざけることができる。
- 87 A 人は悪い行いを常に悔い改めるべきである。
B 悪いことをしても、必ずしも悔い改める必要はない。
- 88 A 私は将来のことを気にする。
B 私は将来のことを気にしない。
- 89 A 親切と不親切は、反対のものである。
B 親切と不親切は、反対とは限らない。
- 90 A 楽しそうなことは、すぐに試してみたい。
B 楽しいことは、先のためにとっておきたい。
- 91 A 人は、自分の怒りを常にコントロールすべきだ。
B 人は、感じた怒りを正直に表わすべきだ。

- 92 A 真に崇高な人でも、時には肉体的欲求を感じる。
B 真に崇高な人は、肉体的欲求を感じない。
- 93 A 悪い結果になるとしても、自分の気持を正直に表現できる。
B 悪い結果になりそうときには、自分の気持を正直に表現できない。
- 94 A 自分の中に湧いてくる感情を恥ずかしいと思うことが、しばしばある。
B 自分の中に湧いてくる感情を恥ずかしいと思うことは、あまりない。
- 95 A 神秘的な体験や恍惚感を持ったことがある。
B 神秘的な体験や恍惚感を持ったことはない。
- 96 A 私は伝統的なものが好きである。
B 私は伝統的なものが好きではない。
- 97 A 罪悪感を感じることはない。
B 罪悪感を感じるがよくある。
- 98 A 愛と性を同じものと考えるのはよくない。
B 愛と性を同じものと考えてもよい。
- 99 A 私は一人でいることを好む。
B 一人でいることが好きではない
- 100 A 私は自分の仕事（学業）に打ち込んでいる
B 私は自分の仕事（学業）に熱心ではない
- 101 A 報われるか否かに関わらず、私は人に好意を向けることができる
B 報われないことが分かっている場合は、人に好意を示すことができない
- 102 A 将来のことも考えて生きるのが重要である
B 現在のことだけ考えて生きるのが重要である
- 103 A 素直な自分である方がよい
B 自分らしさをおさえても、人に好かれたい
- 104 A 自分に都合よく望んだり想像するのは、良いとは限らない
B 自分に都合よく望んだり想像するのは、良いことである
- 105 A 将来のために多くの時間を費やしている
B 将来のためよりも、現在の生活のために多くの時間を費やしている
- 106 A 愛するから、人に愛されるのである
B 魅力があるから、人に愛されるのである
- 107 A 自分を大切にする人は、人からも大切にされる
B 自分を大切にしても、人から大切にされない場合がある
- 108 A 他人に束縛（そくばく）されても気にならない
B 一時的なら他人に束縛されても仕方がない、と思う
- 109 A 正直に言えば、時々人が煩（わずら）わしくなる
B 人を煩（わずら）わしく思うことはない
- 110 A 未来のことだけを考えて生きることが重要である
B 未来だけではなく、現在の生活をもみつめて生きることが重要である
- 111 A 「時間を無駄にするな」という信条を持っている
B 「時間を無駄にするな」というのは、私の信条ではない
- 112 A 未来の私の生き方は過去の体験によって決定される
B 未来の私の生き方は過去の体験とは無関係である
- 113 A 今ここで、どのように生きるかが、重要な問題である
B 今、ここで、どのように生きるかは、さほど重要ではない
- 114 A 自分の人生が完璧（かんぺき）だと思ったことがある
B 自分の人生が完璧だと思ったことはない
- 115 A 本来人間は善になろうとするが、うまくいかないときに悪が生じる
B 人間の本性には善と悪の両面がある
- 116 A 人は生まれつきの性分を完全に変えることができる
B 人は生まれつきの性分を完全に変えることはできない
- 117 A 人に優しくすることをためらう
B 人に優しくすることができる
- 118 A 私は自己主張が強く独断的である
B 私は自己主張が弱くなく、また独断的でもない

- 119 A 女性は素直で従順である方がよい
B 女性は、素直で従順でなくてもよい
- 120 A 私は他人の基準で、自分を見る
B 私は他人の基準で、自分を見ることはしない
- 121 A 自分にある大きな可能性について考えることは良いことである
B 自分に大きな可能性があると考ええる人は、うぬぼれている
- 122 A 男性は、はっきりと考えを主張すべきだ
B 女性は頑固に主張を通す必要はない
- 123 A ありのままの自分を自由に出せる
B ありのままの自分をどうしても出せない
- 124 A いつも有意義なことをしていたい
B 必ずしも有意義なことをしたいとは思わない
- 125 A 過去のことを思い出して悩むことがある
B 過去のことを思い出して悩むことはない
- 126 A 男性も女性も主張と譲歩ができなければならない
B 男性も女性も主張と譲歩のどちらかができればよい
- 127 A 激しい議論に積極的に参加することがある。
B 激しい議論に積極的に参加することはほとんどない
- 128 A 私は自分自身に満足している。
B 私は自分自信に満足していない。
- 129 A 「しばらく、ひとりでいたい」と思うことがある。
B 「しばらく、ひとりでいたい」と思うことはない。
- 130 A 私はいつもものごとを公平に行なう。
B 私はときどきずるいことをする。
- 131 A ときどき、人を傷つけたいと思うほど怒りを感じる。
B 人を傷つけたいと思うほどの怒りを感じることはない。
- 132 A 人とかかわるとき、私は安らぎや信頼を感じる。
B 人とかかわるとき、私は不安を感じる。
- 133 A 「少しの間、一人になりたい」と思うことがある。
B 少しの間でも一人にはなりたくない。
- 134 A 私は自分の失敗を認めることができる。
B 私は自分の失敗を認めることができない。
- 135 A 私の周りにはおろかですつまらない人がいる。
B 私の周りにはおろかですつまらない人はいない。
- 136 A 私は過去のことを後悔することがある。
B 私は過去のことを後悔しない。
- 137 A そのままの私でいることは、周りの人にとってもプラスである。
B そのままの私でいることは、周りの人にとってはマイナスかもしれない。
- 138 A 私には「人生は素晴らしい」と感じた瞬間がある。
B 私は「人生は素晴らしい」と感じたことがない。
- 139 A 人は悪人になる素質を持っている。
B 人は悪人になる素質はない。
- 140 A 未来には希望があるように感じる。
B 未来には希望がないように感じることもある。
- 141 A 人には善と悪とが共存している。
B 人は善い心か悪い心かのどちらかを持っている。
- 142 A 私は過去の経験を生かして未来に向かう。
B 過去の経験は私の未来にとってマイナスである。
- 143 A 時間をつぶすのは難しい。
B 時間をつぶすのは簡単である。

- 144 A 過去の生き方が現在と未来の私に影響を与えると思う。
B 過去の経験が、現在と未来の私に影響を与えるとは思わない。
- 145 A 私の将来はよい友人を得ることができるかどうかで決まる。
B 未来への希望を持てるかどうかは、友人を持てるかどうかで決まるわけではない。
- 146 A 私は意見の違う人にでも好意を持つことができる。
B 私は意見の違う人には好意を持つことができない。
- 147 A 人は本来、善である。
B 人は本来、善ではない。
- 148 A 正直はいつも最善の策である。
B 正直が最善の策とは限らない。
- 149 A 私はものごとを完璧（かんぺき）にこなさなくても構わない。
B 私はものごとを完璧にこなさなければ満足できない。
- 150 A 自分を信じている限り、どんな障害でも克服できる。
B 自分を信じていても、克服できない障害もある。